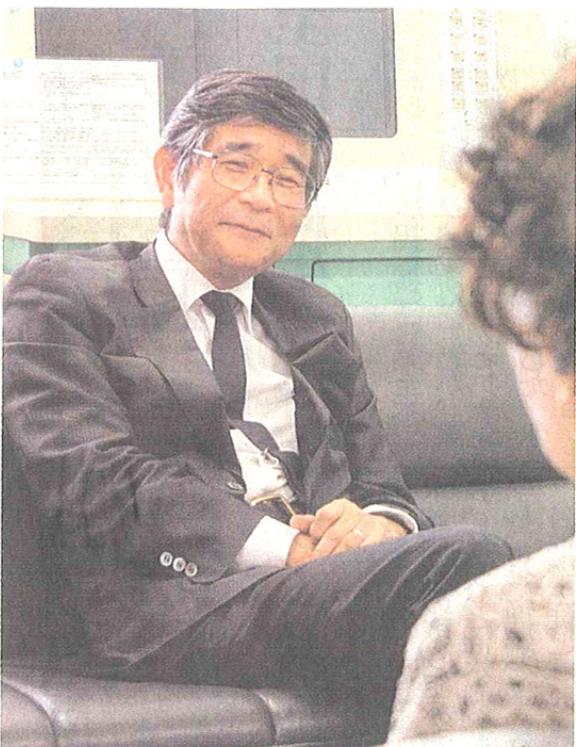


対話でケア「がん哲学外来」



患者と対話する樋野教授

北斗病院が開設準備

提唱者・樋野教授が来院、実践

患者に“言葉の処方箋”

北斗病院（帯広市稻田町基線7、鎌田一理事長）は、がん患者が医師らとの対話を通して生や死と向き合う「がん哲学外来」の開設準備を進めている。今年度中に試験的に取り組み、来年度以降、本格実施の意向だ。実現すれば道内の医療機関では初めて。12日には同外来提唱者で順天堂大学医学部の樋野興夫病理・腫瘍学教授が来院し、患者2人に“言葉の処方箋”を提供した。

同外来は、患者ががんを抱えながらも笑顔で人生を生き切る社会を目指し、樋野教授が2008年に始めた取り組み。心理療法的な手法が特徴。現在、全国約30カ所の医療機関やNPOなどが開設している。医師らが患者や家族と1時間程度話し合う中で、生きることの根源的な意味を見詰める。保険診療として行つてるのは金沢大学付属病院だけで、多くはボランティアによるものだ。

樋野教授は「大切なのは他人の必要性に共感すること

で、これは本来誰にでもできること」とし、「病気について誰でも気軽に語り合える社会をつくりたい」と構想を語った。

（丹羽恭太）

所の対話の場ができるべく、人口1万5000人当たり1カ所、全国で7000カ所の対話の場ができるべく構想を語った。

と、これは本来誰にでもできること」とし、「病気について誰でも気軽に語り合える社会をつくりたい」と構想を語った。（丹羽恭太）

平成25年9月17日(火)付 十勝毎日新聞